

過疎部落における人間関係の推移

石 津 真 一

課 題

本論文において私は、過疎部落の人間関係の推移を考察する。そのために、大滝村の中で過疎の進行が最も著しい部落の一つである中津川部落を調査対象に選んだ。調査の方法は、統計資料の分析と聞き取り調査である。

一、大滝村の概況

まず最初到大滝村の概況を述べる。

大滝村は、明治二十二年四月に大滝、中津川、三峰の三村が合併してできた村である。そしてこの村は、埼玉県の最西部に位置し県総面積の約一割にあたる三二、一

八三haを占めている。東部は、荒川村、北部は、両神村に接し、南部は、東京都及び山梨県に、西北部は、群馬県に接している。この村全体が山地であり、県境には、二、〇〇〇m級の山々がそびえ立っている。その間を荒川、中津川、大血川の三つの川が流れており、これらが途中で合流し荒川となり東へ向っていく。この村では、これらの川にそって十四の部落があり、それらはすべて溪谷に位置している。

この村は、交通機関に恵まれず秩父市へ約二十五km、熊谷市まで六十五kmあり、これらの都市とは国道一四〇号線で結ばれている。その他、県道一路線が国道から分岐し、これが、この村の産業に重要な役割りを果たして

いる。この村の総面積の九十五%が山林をなしているために、林業のウエイトは高く、農業は大きな役割りをもっていない。山林の所有区分を見ると、国有林が四十九%、県有林が十二%、私有林が十八%、その他は村有林、部落有林などである。

大滝村の世帯数及び人口数は、昭和三五年世帯数一、四一七戸、人口八、三四九人、四〇年世帯数一、四一五戸、人口六、九三〇人、四五年世帯数一、二二三戸、人口四、九二二人、五〇年世帯数九二三戸、人口三、三九九人、そして、昭和五四年四月現在においては、世帯数八五六戸、人口二、九七七人であり、この二十年間に世帯数は三九・六%、人口は六四・四%減少というように世帯数、人口共に減少が著しいのである。

二、中津川部落の概況

次に調査対象部落である中津川部落について見ると、昭和四六年世帯数七八戸、人口二八〇人であったが、五四年には世帯数五八戸、人口一七一人と急激な減少を示している。

中津川部落の世帯主の職業構成を見ると林業が三十二人、農業一人、鉱業八人、商店三人、その他であり、林業に従事する者が過半数を占め、鉱山関係に従事する者がこれに次いでいる。このうち林業に従事している者は、県有林、国有林の作業に雇用されている。

中津川部落は、従来は下手部、傘部、猿一部、栃ノ平部、若沢部、大冠部という六つの部に分かれていたが、現在では、下手部が一〜三組に分かれ、傘部が四・五組に分かれ、猿一部が六組に、栃ノ平部が七組となっている。

なぜこうなったのかと言うと、昭和四〇年代後半において、世帯数、人口の減少が激しく、また部落の入口（下手部）に、世帯数、人口数が集中したために、各組の人口が不均等になったためである。

三、区長の役割

次に、中津川部落における人間関係について述べることにする。まず第一に区長の役割である。

部落には、その総まとめ役として区長がおかれてい

る。この区長というものは、いつの時代においてもその部落なり地域の象徴として、その人々に尊敬され、かつ親しまれている人である。

中津川部落の場合昔は、S家が数千ヘクタールの山林を所有することによって、部落の実権を握っており、土地所有、財政、部落の人々の生活などを、完全に支配していた。現在では、S家から分家した三男のS氏が区長の役目についている。というのは、S家の長男次男が、この部落に住んでいないからである。この区長の選出方法については、昔と今では、非常に異なる点がある。

戦前においては、S家が絶対的な権限を有していたので、大正時代に部落有林が県有林となり、S家の私有林に部落民は雇用されたのであるけれども、戦後、鉱山に働く者が増加し、私有林の雇用も減ったという関係で、山主と部落民の關係にひびが入ってきた。そこで後援会という組織を作り、戦前のような支配關係を取りもどそうとしたが、思うように効果が上がらなかった。そこで現在の区長は、部落をまとめていくためには自分が率先してやらねばならないと考え、祭り、道刈りをする場合

には、自ら人々の中に入って働くというような努力をしたのである。その結果、部落の人々から非常に信頼されるようになったのである。この信頼關係を基礎にした区長の役割を具体的に述べると次の二つであろう。

まず第一の役割は、村行政の末端機構として村役場と部落の人々とを結びつける役割である。この部落では、月に一回月末になると国民年金、電気料金、水道料金、テレビ料金などを徴集し役場に届けたり、その他行政事務を各家にいきわたらせるという役目である。

中津川部落には、各組に組長がおり六〜七軒から多いところでは、十軒を取りまとめている。又集金の際には組長が一軒一軒回って集め、この徴集したものを毎月二十日まで区長のところに持っていく、区長がそれを役場に持っていくのである。

区長の第二の役割は、部落内の人々をいかにしてよくまとめていくかということである。これは道刈り、祭り、寄り合い（部落全体あるいは、区長と組長だけの集まりもある）などの共同の場を通して、人々と共に作業をしたり、話し合ったりということで、コミュニケーション

を重ねて、人々をまとめていくのである。

四、組の組織と機能

次に組の組織と機能というものについて述べる。先に述べたように、組としては、十年ほど前までは六つの組があったが、これは部と呼ばれていた。昭和四〇年代に世帯数、人口数のアンバランスを解決するために、七つの組に再編成したのである。この組の機能というものは冠婚葬祭が行なわれる場合に、その組の助け合いの機能が最も良く発揮されるのである。中津川部落の場合葬式には、他村等から多くの人々が集まってくるので中津川部落の人々が、総出で葬式を行なわなければならない。私が調査した第二組の葬式の様子は、次のとおりである。

この第二組の人は、全員お勝手に回り葬式の終わった後に出すごちそう作りを行なうのである。そして、他の組の中から、受付けを六人、接待係を数人出し、他の土地からこの葬式に来る人々の相手をするのである。その他の組の人々は（男子四十人ほど）墓掘りといって死人

を埋める墓穴を掘りに出かけるのである。この地方の葬式は全て神道によるものである。死人の葬り方については、現在は火葬が多くなったが、二三年前までは、埋葬によって行なわれていたのである。しかし現在でも遺言などによって、埋葬の希望がある場合にはそれに従う。なおこの村では、香典返しはしない習慣になっている。

次に結婚式について述べると、結婚式は葬式とは異なつて、非常に質素に行なわれている。おぜん立てから式の運営にいたるまで、すべて親戚の人の手によって行なわれている。しかしこの形態も現在では、少しずつ変わってきている。都会で行なわれているような形式が導入され、村の公民館を借り切るなどして行なうこともなされるようになったようである。

次に道刈りにおける組の機能を述べることにする。これは、部落じゅうの人々の協力によって、部落内の主な道路の草刈りをしたり、落石や土砂崩れなどの始末をする助け合いの共同作業である。部の時の連絡方法は、家から各部の長のところに連絡がとどき、そこから各家に

伝達されるのである。この場合、一軒の家からは、二人から三人の者が出席したのである。そして、ある者達は道路の草刈り、あるいは石をどかす、又ある者は、神社のまわりの手入れをする、というように行なわれたのである。これは、不定期的なものであったが、非常に頻繁に行なわれていたのである。現在では、この道刈りの通達は役場から出され、それを区長が受け、さらに各組の組長に伝達されるようになったのである。この場合、各組から出される人数は減ったのである。なぜならば、除草剤や自動車の普及によって、その作業内容が非常に良くなったために、人数も各家から一人出せば良いようになり、この回数も、一年に数日、道路愛護週間だけになってしまった。しかし、従来この道刈りという作業は部落内の清掃というだけではなく、この共同労働を通じて各組の人々同志が、お互いにコミュニケーションをはかるといふ機能を持っていた。これが、減少してきた現在では、この部落とか組とかいう集団の持つ独特な結集力にひびが入り、相互作用がしだいに薄れてくるようになったのである。

五、部落の財政

次に部落の財政について見てみると、それは、部落内の各家から出される区費を中心としてまかなわれているのである。中津川部落の場合は、月二〇〇円であって、その徴集の仕方は、月末になると、組長が一軒一軒回って集め、これを区長代理（会計担当者）のところで持参するのである。最近では、半年ぶんをまとめて払う家もあるようである。又区費の中には、部落協議費以外に村の補助金、国民年金・水道料金・健康保険税の数パーセントが、各部落の集金組織に還元される。その他、納税報奨金（村民税、固定資産税、軽自動車税）の三％が納税組合を兼ねている部落に報奨金として渡される。区費の使用目的はいろいろあるが、主なものは、歩道修理工費、有線放送修理代、村民体育祭参加自動車代および慰労会、公民館ストープ代金、消防点検慰労金、歳末助け合い募金、ソフトボール大会慰労会などに支出される。

六、氏子集団

次に、中津川部落の氏子集団と壇徒集団について述べることにする。中津川部落の人々は、氏神の信仰が厚く葬式、結婚式を行なう場合には、それらすべてを神式で行なっている。そのために、この部落には、無人の神社が一軒あり、葬式や結婚式などの行事がある場合には、神主が出張してくるのである。この神主は、部落から二十kmほど離れている三峰神社の神主である。そして、この三峰神社は、大滝村全域の各部落に対して小さな神社を一社づつ持っているのである。中津川部落の神社では毎年八月二十六日に例祭が行なわれている。これは、みこしが出たりする大がかりな祭りではないが、この時には部落じゅうの人々が出席し、酒を飲んだり歌を歌ったりの、どんちゃん騒ぎが行なわれ、一年間の思い出を語ったり、来年の抱負を語るなどするのである。いわば、部落の人々が一体となって今までの疲れを洗い流すのである。そして、この祭りが行なわれる日にも、かならず神主が出向いて、おはらいをするのである。なぜこの部落では、氏神の信仰が厚いのかを調べてみると次のとおりである。

この地方にも昔は寺があり、その壇徒集団が非常に広範圏にわたって存在していた。古くは、この三峰神社も寺であったということである。しかし、明治元年三月十七日に政府から神仏分離令が出され、これによって三峰山頂の寺（これは、神仏混淆の寺であった）が廃止されそれが三峰神社となった。

この命令が出される以前のこの地域では、仏教と神道の両方を信じていたのである。しかし、神仏分離令が出されて以来、仏教の信仰が衰え、氏神の信仰だけがこの地域全体を支配するようになったのである。この大滝村においては、中津川部落以外の部落でも同じように氏神の信仰が厚いのである。又この命令によって、この地域の寺がすべて無くなってしまったのではなく、大滝村の中心部では、大陽寺という寺が残っている。このため、明治元年に、神仏分離令が出されたけれども現在でも役場のある地区などでは、神棚と仏壇の両方があり、同時にその両方を信仰している人もある。以上の理由から、この中津川部落の人々の間では、氏神の信仰が非常に強く、一日に何回も神棚を拝んでいるのである。

結 論

この部落の人間関係の変化は、過疎の進行が始まる以前にすでに始まっていた。それは、林業が衰退したことが原因となっており、そのために部落の人々の従来から築き上げてきた生活の基盤が崩れていったのである。そして、この林業の衰退によって戦前の山主と使用人の支配関係が崩れてきたのである。ひと口に林業といっても戦前においては、部落の人々が山主であるS家に雇われ、戦後においては、国と県に雇われる形をとったのである。それで、戦前には、山主であるS家の一方的な支配関係があり、部落の人々の間で強い結集力が生まれていたのである。それが、戦後の高度経済成長期に崩れ出し、さらに昭和四十年代以後の人口減少によって、いっそう激しさを増したのである。そして、部落社会の内部では、住民所得が平均化したということもある。

以上のように、戦前の山主による一方的な支配関係の消滅した現在では、区長が祭りや道刈り、葬式、住民相談などに積極的に取り組むことによって、信頼関係に基

く新しい人間関係を築く努力を重ねているのである。

このようにして、中津川部落の人間関係の基本的な原理は、山主の住民に対する一方的な支配関係から、区長・組長と住民の間及び住民同志の間における信頼関係へと変わったのである。

(いしづ しんいち、本学四年次生)